

2015年度事業報告

1. 会員動静 (2016年2月20日現在)

	新入会員	退会	資格喪失	逝去	現在数
名誉会員	2			3	32
正会員	117	49	30	15	2,930
(うち学生会費納入者)	(71)	(18)	(17)	(0)	(423)
賛助会員	0	0	0	0	12
計	120	49	30	18	2,974

2. 逝去会員

名誉会員

杉村 暢 二 2015年5月29日

竹内 淳 彦 2015年6月19日

Wise, Michael J 2015年10月13日

正会員

岩崎 孝 明 2013年9月17日

田中 完 一 2014年9月6日

須藤 英 雄 2014年11月18日

高重 進 2015年1月6日

太田 孝 2015年1月19日

山中 博 2015年1月26日

山崎 静 雄 2015年2月16日

土 隆 一 2015年4月2日

滝澤 公 男 2015年4月5日

杉田 糺 2015年7月26日

神戸 祐 三 2015年8月30日

伊藤 安 男 2015年10月8日

矢ヶ崎 孝 雄 2015年10月28日

塚田 公 彦 2015年12月24日

松林 武 2016年1月3日

3. 出版刊行物

地理学評論	6冊 (88巻3号～89巻2号) 528ページ
Geographical Review of Japan Series B	2冊 (87巻2号,88巻1号・電子ジャーナル) 116ページ
E-journal GEO	2冊 (10巻1号～2号・電子ジャーナル) 176ページ
学術大会発表要旨集	2冊 (88号～89号) 552ページ

4. 集 会

集 会 名	開催年月日	参加者
(1)秋季学術大会(愛媛大学)	2015年9月18日～9月20日	456名
一般(口頭)発表(122)、ポスター発表(55)、シンポジウム(3件・21)	9月18日～9月19日	
第28回地理教育公開講座	9月19日	
研究グループ集会(14件)	9月19日	
懇親会(生協食堂)	9月18日	221名
巡検2件	9月20日	
(2)春季学術大会(早稲田大学)	2016年3月20日～3月23日	
一般(口頭)発表(194)、ポスター発表(97)、シンポジウム(8件・46)	3月21日～3月22日	
第29回地理教育公開講座	3月20日	
研究グループ集会(24件)	3月22日	
懇親会(リーガロイヤルホテル東京)	3月21日	
巡検3件	3月23日	

5. 総会等

(1)定時総会	2015年6月27日	出席者12名	委任状86名	合計98名
(2)臨時総会	2016年3月20日			
(3)代議員会	2015年9月18日(第1回) 2016年3月20日(第2回)	出席者33名	委任状59名	合計92名
(4)理事会	5回・常任理事会	12回		

6. 専門委員会報告

(1) 総務専門委員会

公益社団法人としての学会の通常の運営を円滑に進めるために、記録の整理保管、会員関連事務（総会・代議員会関連、理事会関連、会員の入退会など）および対外的事務（後援・協賛依頼、転載許可、その他依頼に対する対応など）、事業計画書の作成、内閣府との連絡、学会事務局の環境整備に関する業務などを行った。

また、日本地理学会賞、出版助成、小林浩二研究助成、斎藤 功研究助成、若手研究者国際会議派遣助成に関する業務などを行った。

(2) 財務専門委員会

1) 会費の徴収および予算執行に関わる通常会務を行った。

2) 2015 年度決算書（概算）案、および 2016 年度の収支予算案を作成した。

(3) 地理学評論編集専門委員会

地理学評論第 88 巻第 3 号～第 89 巻第 2 号を編集、発行した。掲載された論文数は、論説 11 編、総説 1 編、短報 8 編である。掲載論文数は、ほぼ昨年度並であった。このうち 4 編が自然系、16 編が人文系であり、自然系の掲載論文の割合は昨年より減少しており、少ない状況が続いている。このほかに書評 29 編、紙碑 3 編、地理学関係博士論文要旨、学会記事等を掲載した。本年度に受理された論文数は 15 編であり、昨年度より 2 編減少した。そのうち自然系の割合は約 13%であり、昨年度に比べて半分に以下に激減した。新規投稿数も昨年度より減少して 36 本であり、しかも自然系の論文の割合は昨年より大きく減少して 19%にとどまった。本年度の掲載論文・受理論文および新規投稿論文において、自然系の数がかなり少なく、人文系の論文が大半を占める結果になっている。編集作業の迅速化をはかるために編集のオンライン化がなされて 2 年目において、投稿数が減少しており、より多くの投稿が期待される。

(4) Geographical Review of Japan Series B 編集専門委員会

Geographical Review of Japan Series B（地理学評論英文誌）は、電子ジャーナルとして 2015 年 7 月に Vol. 87, No. 2 を発行し、Doreen Massey 教授の特別講演録、およびその解説記事、「Environment Evolution and Human Activity in the Late Quaternary: Geographical Pattern」特集号の記事（前書き 1 編、論説 4 編、短報 2 編）、および短報 1 編を掲載した。2016 年 2 月に発行した Vol.88, No.1 には、論説 2 編、短報 1 編を掲載した。

(5) E-journal GEO 編集専門委員会

オンライン学術誌 E-journal GEO では、2015 年 10 月に執筆要領の改訂を行った。今期の編集専門委員会が編集・発行した第 10 巻は 5 回のアップロードがなされ（2016 年 3 月 1 日現在）、解説記事 3 編、調査報告 3 編、シンポジウム記事 9 編を掲載した。さらに、2016 年 3 月には調査報告 1 編、地理教育総説記事 2 編、シンポジウム記事 3 編、若手研究者国際会議派遣事業報告書 4 編がアップロードされる予定である。さらには二つの特集（「流通・産業の地理学」、「宗教の地理学」）について、アップロードに向けて準備を進めている。本誌は「第 3 学会誌」として、広く会員からの投稿を受け付け、比較的短い期間で査読を行い、投稿された研究成果を公開することを目的としており、今後はさらに編集体制を強化するとともに、速報性ある学会誌として社会貢献を図っていく必要がある。

(6) 集会専門委員会

2015 年秋季学術大会（愛媛大学、一般発表 122、ポスター発表 55、シンポジウム 21、巡検 2）ならびに 2016 年春季学術大会（早稲田大学、一般発表 195、ポスター発表 97、シンポジウム 46、巡検 3）のプログラム編成および要旨集編集の業務を行った。

(7) 広報専門委員会

学会ホームページの更新を月数回のペースで随時行った。また、ツイッターとフェイスブックによる情報発信を継続的に行った。ツイッターでは学会からの情報提供と、他者が発信した地理学に関する記事の転送を行っているが、約 8000 人の人達（フォロワー）に閲覧されており、大きな反響を得ている。フェイスブックはツイッターの情報の一部を転送するメディアとして機能している。

高校生が日本地理学会の活動に参加する機会として、春季学術大会・秋季学術大会で高校生によるポスターセッションを実施した。ホームページ、ツイッター、メーリングリスト等で呼びかけを行い、春季は 20 件、秋季は 24 件の発表が行

われた。2014年に開始した本セッションは、今後の大会でも続けて行う予定である。

地理情報システムに関する商業誌 GIS NEXT に、日本地理学会のページを確保していただき、会員による研究や GIS の動向に関する記事を寄稿した。

(8) 交流専門委員会

- 1) 国内外の関係諸団体および個人からの後援・協賛などの依頼・問合せに対応した。
- 2) 2015年8月開催のIGU ロシア・モスクワ国際地理学会議のセッション提案に協力した。2016年8月開催予定のIGU 北京国際地理学会議に向けた日本ブース設置のための準備を行うとともに、セッション提案に協力した。
- 3) 日本学術会議および加盟している連合組織（地理学連携機構・地理関連学会連合・日本地球惑星科学連合・自然史学会連合など）との連絡・交渉を行った。2015年以降、地理学連携機構の事務局として機能を果たし、2016年3月開催の年次会議開催にむけた準備を行った。
- 4) 日本地球惑星科学連合の地球人間圏科学分野でのサイエンス・ボード、環境・災害対応委員会などにおける活動、ならびにプログラム作成に協力した。
- 5) 日本地球惑星科学連合の2016年大会に参加する準備作業を行い、「津波堆積物」を一般セッションの提案母体となって関連学会と共催して提案した。
- 6) 2015年10月9～12日まで上海市において第10回中日韓地理学会議（大会アジア地理学会議）を共催した。
- 7) 防災学術連携体に加盟し、2016年1月9日開催の学術フォーラム「防災学術連携体の設立と東日本大震災の総合対応の継承」の準備に協力するとともに、日本地理学会の防災事業にかかわる活動を発表した。
- 8) 交流専門委員会のHPを立ち上げ、掲示板には国際会議関係、日本学術会議関係他の会議アナウンスを適時掲載するようにした。

(9) 企画専門委員会

- 1) 本年度は7回の委員会を開催した。
- 2) 当学会は、「G 空間 EXPO2015」に参加し、企画専門委員会は「遊びから始まる地理のフロンティア」のシンポジウム（2015年11月28日（土）実施）の企画を担当し、準備に取り組んだ。シンポジウムでは、約130名の参加者があり、パネルディスカッションも実施し、活発な討議がなされ、盛況だった。
- 3) 「英文叢書出版事業」に関し、応募の促進に努めた。
- 4) 国土地理院との共催によるサマースクールの企画を担当し、2016年度に「地図と測量の科学館」で開催見込みとなった。

(10) 地理教育専門委員会

地理教育専門委員会は、ほぼ毎月1回定例で開催している。本年度の活動は以下の通りである。

- 1) 高等学校地理必修化に関してのシンポジウムへの委員の派遣や関係者への情報提供および情報収集を行った。
- 2) 地理オリンピックを支援した。8月にロシアで行われた国際地理オリンピックでは銀メダル3、銅メダル1を獲得し、参加40カ国のうち第5位という好成績をおさめた。2016年1月に行われた科学地理オリンピック兼国際地理オリンピック選抜試験では、1561人の申し込みがあり、そのうち140名ほどが2月に実施された第二次試験に進んだ。
- 3) 小学校から高等学校の教員を対象とした教員研修を茨城県大子町、埼玉県で実施した。
- 4) 大学入試に関して、センター試験の分析をし、入試科目に加えてもらうための陳情を国立大学法人の大学を対象に検討した。
- 5) 一般向けの地理教育公開講座（春季学術大会、秋季学術大会）を支援した。また、高校生によるポスターセッションに協力をした。
- 6) 地理教育に関する国際シンポジウムを共催し、アメリカ、イギリス、フィンランドの地理教育研究者との交流を図った。

(11) 資格専門委員会

2015年度中に資格専門委員会は8回、管轄する地域調査士認定委員会は5回、GIS 学術士資格委員会は3回開催した。地域調査士講習会は、2015年4月（駒澤大学）、6月（日本地図センタービル（専門地域調査士講習））、10月（立命館大学大阪梅田キャンパス）、11月（専修大学神田キャンパス）の計4回開催した。受講者数は、地域調査士講習会256名、専門地域調査士講習会12名であった。2015年度は2月24日現在、地域調査士29名、専門地域調査士13名が認定された。学部科目については20大学・22学科（コース）、大学院科目については5大学院の開設科目が認定されている。

2014年度から地域調査士認定に「申請前部分審査」制度を導入し、学部4年生が在学中に地域調査士の認定を受けら

れるようにした。2月24日現在、年度内の認定を目指す者65名が適合審査を請求したが、これは前年比+13名である。また、地域調査士通信を発行した(第3号、2016年3月)。

2月24日現在、GIS学術士実績証明団体数は31、GIS専門学術士実績証明団体は15である。また、2015年度にGIS学術士と認定された者は20名、GIS専門学術士と認定された者0名、GIS学術士(見込み)認定者は17名であった。

なお、両資格に関する商標登録について弁護士事務所を通じて申請中である。また、2016年3月に地域調査士資格に関して、国土地理院へ「請負測量業務の競争入札のための測量技術者の認定資格登録」の申請を行った。

7. 各種委員会報告

(1) 名誉会員候補者推薦委員会

委員長：菅野峰明

委員：海津正倫、白坂 蕃、三上岳彦、溝口常俊

本委員会は日本地理学会の規約に則り、委員間で慎重に検討・審議した結果、対象となる全会員の中から、下記2会員を付記した理由により、名誉会員候補者として推薦することを決定した。

名誉会員候補者：中山修一会員

推薦理由：中山修一会員は広島女子大学、広島大学に勤務し、長年にわたり、人文地理学の研究と教育に従事してきた。同会員はインドのバナラス・ヒンドウー大学大学院に留学した経験を持ち、インドに関する人文地理学研究に精力的に取り組んできた。また地理教育分野の研究にも力を尽くした。この間、多くの著書・論文・翻訳書を発表するとともに、地理学評論に欧文論文を含めて2編、書評2編を発表し、地理学の研究と教育を推進してきた。

同会員の地理学界における第一の貢献はインド研究である。主要著書である『北インドにおける工業化過程』(古今書院、1982年)、「Rural Development in the Drought Prone Areas of South Deccan Plateau in India」(*Geographical Review of Japan* vol. 58, 1985年)、さらには「インドにおける都市研究の展開—インド人研究者の成果を中心に—」(人文地理38巻、1986年)に示されているように留学経験をいかしてインド研究への道を切り拓いてきた。同会員が留学していた頃のインドは、いわゆる開発途上国であったが、今日のインドの工業発展や国家としての重要性を早くから認識して、インド研究の重要性に先鞭をつけた功績は大きい。

同会員はインド研究に加えて地理教育の分野でも顕著な功績を残している。『地理にめざめたアメリカ—全米地理教育復興運動—』(古今書院、1991年)はアメリカ合衆国において地理教育が学校教育のなかで重要な役割を演じている理由とその背景を分析し、日本の地理教育界に警鐘を鳴らした。その後も「海外における地理教育改革の諸動向とその事例」(地理学評論71巻、1998年)、「高等学校における地誌学習の原理と技法—改訂学習指導要領をめぐって—」(新地理47巻、2000年)などの論文において地理教育の重要性を豊富な海外事例を通して分析し、学校教育におけるその重要性を活発に発信してきた。

日本地理学会では会員歴57年におよび、その間、専門委員(欧文機関誌編集専門委員会委員2期；地理教育委員会委員2期；地理教育専門委員会委員1期；国立地図学博物館設立推進委員会委員長2期；国立地図学博物館設立推進委員会委員10期)として尽力し、また評議員・代議員を5期にわたって歴任し、日本地理学会の発展に多大なる貢献をしてきた。

以上の功績により、中山修一会員を本会の名誉会員として推薦する。

名誉会員候補者：松田磐余会員

推薦理由：松田磐余会員は、長年にわたり東京都立大学、関東学院大学に勤務し、自然地理学、特に地形学を中心とした研究と教育に従事され、2010年には関東学院大学から名誉教授の称号を授与された。この間に、地理学評論掲載論文6編、書評等9編をはじめ、地理学関連学術書に多数の論文・報告を発表し、地理学の研究と教育を推進してきた。

同会員の研究業績は、地理学評論(46巻、1973年)に発表された「多摩川低地の沖積層と埋没地形」をベースに、東京圏における地形・地質(地盤)の形成史を解明し、自然災害の脆弱性を検証するという点に力点が置かれている。その成果は、最近の研究業績「東京の自然災害脆弱性を検討する」(地学雑誌122巻、2013年)にもまとめられている。この中で同会員は、自然災害の自然的・社会的素因の変遷と災害対策について、被害想定結果から、自然的素因が克服されていないこと、人為的改変の弊害が明確になっていること、木造住宅密集地域が解消されていないこと、そして東京一極集中的な都市の発展と防災投資の乱用が災害を進化させてきたと指摘している。

同会員は、専門の研究業績に加えて、『江戸・東京地形学散歩—災害史と防災の視点から』(之潮、2009年)、『対話で学ぶ 江戸東京・横浜の地形』(之潮、2013年)など、一般向けのわかりやすい著書を数多く出版している。東日本大震災を契機に、居住地や通勤・通学範囲の地形や地盤についての正しい知識を持つことの重要性が再認識されているが、同

会員による一連の著書では、過去の地形図をたどりながら、数多くの地質断面図から沖積層の発達史を考察し、地形の成り立ちや災害との関連を解説している。

同会員は、東京都防災会議地震部会専門委員、東京都地域危険度測定調査委員会副委員長などを歴任するとともに、日本地理学会においては、会員歴 50 年、その間に学会運営検討委員会委員を務めるなど、地理学界の発展に尽力した。

以上の功績により、松田磐余会員を本会の名誉会員として推薦する。

(2) 日本地理学会賞受賞候補者選考委員会

委員長：境田清隆

副委員長：池 俊介（小委員会A）、山川修治（小委員会B）、境田清隆（小委員会C）

委員：小委員会A（優秀論文部門、若手奨励部門、論文発信部門）：池 俊介、岩間信之、作野広和、友澤和夫、前李英明、松山 洋、山中 勤

小委員会B（優秀著作部門、著作発信部門）：山川修二、荒又美陽、小野有五、島津俊之、鈴木毅彦、平岡昭利、山本 充

小委員会C（地理教育部門、学術貢献部門、社会貢献部門）：境田清隆、近藤昭彦、白岩孝行、高橋春成、竹内裕一、根田克彦、宮原育子

選考委員会の答申を受け、理事会決定した受賞者名・選考理由を下記に掲載する。

優秀論文部門受賞候補者：中澤高志会員

「高度成長期の地方織物産地における「集団就職」の導入とその経緯—福井県勝山市の事例から—」『地理学評論』第 88 巻第 1 号

本論文は、高度経済成長期における非大都市圏の織物産地の「集団就職」の実態を、受入れ側と集団就職者側の両面から分析し、「集団就職」という制度が社会的・地域的にどのように成立し調整されたかを解明するとともに、集団就職者へのインタビューを通じて集団就職者の意思決定や定着過程をも明らかにした優れた実証研究である。特に、地方から大都市への人口移動ではなく地方から地方への移動に着目した点や、勝山市における労働市場の態様を地誌的に描き出そうと試みた点には、高いオリジナリティが認められる。本論文は労働の地理学の射程を広げる意欲的な研究であり、学術的に高く評価できる。

若手奨励部門受賞候補者：羽佐田紘大会員

「GIS を用いたボーリングデータ解析に基づく濃尾平野の 3 次元構造と堆積土砂量の復原」『地理学評論』第 88 巻第 2 号

本論文は、2700 本を超えるボーリングコアの分析と 218 点の ^{14}C 年代測定値に基づき、濃尾平野の沖積層の地下構造を 3 次元で復原した研究である。多数のボーリングデータを GIS 上で解析し、濃尾平野の環境変遷史を定量的に明らかにした独創性に富む論文として高く評価できる。特に、1000 年前以降の堆積土砂量の増加を農耕や森林伐採等の人間活動の影響と関連づけて説明した点は特筆に価する。これらの研究成果は、防災や社会インフラ整備においても有用性が高く、本論文の社会的価値はきわめて大きい。

論文発信部門受賞候補者：荒木一視会員

「食料の安定供給と地理学—その海外依存の学史的検討—」E-journal GEO、第 9 巻第 2 号

本論文は、明治期以降の日本の食料供給を穀物の海外依存という視点から俯瞰するとともに、この問題に関する膨大な地理学研究を学史的に整理・検討した労作である。食料の安定供給は地理学が貢献すべき重要なテーマであるにもかかわらず、食料供給の海外依存という現実が十分に認識されず、地理学研究の関心が低かった点を指摘し、それを踏まえて食料の安定供給のための仕組みについて独自の提言がなされている。フードシステムの視点から「食」をめぐる地理学の方角性を示した発信力の高い論文であり、その学術的意義は大きい。

優秀著作部門受賞候補者：遠藤邦彦会員

遠藤邦彦会員による『日本の沖積層—未来と過去を結ぶ最新の地層—』（富山房インターナショナル、2015 年）は、著者が長年取り組んでこられた沖積層に関する研究のうち、主に 1980～1990 年代に執筆された学術論文をコアとする成果の集大成である。本書の優れた点は、豊富なデータと深い考察により進められた研究成果について、関東平野をフィールドとした沖積層の堆積史・地形発達という事例研究で終わらせず、沖積層研究としての一般化につとめているところにあ

る。また近年興隆するシーケンス層序学に対する著者自身の見解も述べられ、津波や液状化問題など自然災害から環境問題をも含めた多角的な構成となっている。過去の研究成果に留まらず、純理学的にも実学的にも未来を展望した書籍であり、完新世、沖積層、低地の地盤災害に関心をもつ研究者には大きな指針となるであろう。以上の諸点から、本著作は日本地理学会賞（優秀著作部門）に十分値する作品であると高く評価される。

著作発信部門受賞候補者：金坂清則会員

金坂清則会員による著書『ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界 (In The Footsteps of Isabella Bird: Adventures in Twin Time Travel)』(平凡社、2014年)は、著者の地理学者としての立場を十分に活かしつつ、これまで国内外で開催してきたイザベラ・バードの足跡を辿る写真展の成果を踏まえ、新たに和英併記で著した書物である。地理学者が、旅の魅力を「ツイン・タイム・トラベル」という分かりやすい造語を用いて国際的に発信した意義は大きい。さらに景観地理学的な観点を大きく発展させたことは特筆される。「歴史地理学」(第56巻第5号)など国内の数多くの書評のみならず、ハワイ大学マノア校日本研究センター (University of Hawaii at Manoa Center for Japanese Studies) のウェブサイトで英文の紹介がなされているなど、内外から高く評価されている。以上の諸点から、本著作は、日本地理学会賞（著作発信部門）に相応しい作品であると高く評価される。

地理教育部門受賞候補者：伊藤智章会員

伊藤智章会員は高等学校の教諭をしながら、2000年代以降、積極的にGISを用いた高等学校における地理教育の論文を発表してきた。それらの業績は、『いとちり式地理の授業にGIS』(古今書院、2010年)にまとめられており、本書には、優れた実践例が示されている。伊藤氏は2011年に一般社団法人地理情報システム学会の「初等中等教育におけるGISを活用した授業に係る優良事例表彰」において国土交通大臣賞を、また2010年と2015年に毎日新聞社賞を受賞している。さらに伊藤氏はウェブサイトでも積極的にGIS教育の実践例を発信し、GIS教育の普及に貢献している。これらの点で、伊藤智章会員を日本地理学会賞（地理教育部門）の候補者として推薦する。

学術貢献部門受賞候補者：氷見山幸夫会員

氷見山幸夫会員は1980年に北海道教育大学に奉職後、地理学、特に土地利用研究において多大な成果を修めてきた。氷見山会員が作成した全国土地利用データベース (LUIS)は、日本における明治・大正期、昭和中期、昭和末期の2kmメッシュの土地利用データセットとして、日本の土地利用研究を牽引するだけでなく、世界における日本の土地利用研究の先駆性を認識させるものであった。また、国際地理学連合(IGU)副会長、日本地球惑星科学連合・地球人間圏科学サイエンスセクションプレジデントの重責を担い、2013年京都国際地理学会議の成功に貢献した。またその後もFuture Earthにおける地理学の役割を隣接学会に説明するなど、日本学術会議における活動を通じ日本の地理学の発展に大きな貢献を果たしてきた。以上より、氷見山幸夫会員を日本地理学会賞（学術貢献部門）の候補者としてここに推薦する。

社会貢献部門受賞候補者：中田 高・渡辺満久・鈴木康弘会員

受賞候補者たちは、長年にわたり、日本地理学会の変動地形研究グループのメンバーとして活断層の調査・研究に携わり、学術論文や普及書、マスコミ報道などを通して社会的な発信を続けてきた。2011年3月11日の東日本大震災発生以後、原子力発電所の安全点検の一環として周辺の活断層の総点検が始まったが、そのなかで、受賞候補者たちは、活断層の存在や活断層研究の学術成果を否定し続ける電力事業者や原子力発電推進勢力に対抗して、変動地形学研究成果に基づいて原子力施設の安全性に対する警鐘を鳴らし続けた。国の設置した原子力規制委員会における審査にも加わり、その安全審査に変動地形的研究の成果を反映させた。これらの一連の成果は、地理学界からの社会貢献として特筆すべきものであり、日本地理学会賞（社会貢献部門）の候補者として強く推薦する。

社会貢献部門受賞候補者：平井信行氏

平井信行氏は、東京学芸大学教育学部で地理学、特に気候学を学んだ後、日本気象協会に入り、1996年にNHK総合テレビのお天気キャスターとなった。今日、テレビで多くの気象予報士が活躍しているが、平井氏はその草分け的存在である。

平井氏のテレビでの天気予報の解説は、地理学的知見も含めてわかりやすく、その誠実な解説ぶりは、多くの視聴者からも支持されている。そのことは「NHKおはよう日本」、「ニュースウオッチ9」など主要なニュース番組の天気予報の解説を担当してきた実績に反映されている。また『天気予報はこんなに面白い』(角川書店、2001年)、『雑学読本NHK天気質問箱』(日本放送出版協会、2001年)の著書もある。平井氏がこれまで果たしてきた社会的貢献は、日本地理学会賞（社会貢献部門）にふさわしいと考え、ここに推薦するものである。

(3) 国立地図学博物館設立推進委員会

委員長：鈴木厚志

委員：池谷和信、岩本廣美、太田 弘、小口 高、北川建次、齊藤忠光、清水靖夫、白石 陽、鈴木純子、滝沢由美子、中川 章、中山修一、西川 治、細井将右

本年度の同委員会は、これまでの当委員会活動経緯の整理、当委員会活動に関連する印刷物の収集と保管、国内地図所在情報の把握とリスト化の準備、今後の当委員会のあり方（委員会名称を含む）の検討を活動方針としてスタートした。また、東京大学柏キャンパスの動向および国土地理院・日本地図センターによる地図所蔵に関する調査についても情報交換を行った。具体的には、全体会議と委員長を含む5名のワーキンググループを組織し、協議を進めた。

(4) 災害対応委員会

委員長：熊木洋太

委員：青木賢人、青木朋子、宇根 寛(幹事)、海津正倫、岡谷隆基、小口千明、久保純子、坂上寛之、佐藤 浩、須貝俊彦、杉戸信彦、鈴木毅彦、鈴木康弘、田中 靖、西村智博、八反地 剛、堀 和明、村山良之、吉田英嗣(幹事)

災害対応担当理事：春山成子

2015年度、本委員会は、4回の委員会と秋季学術大会時、春季学術大会時（予定）に拡大委員会を開催し、以下の活動を行った。

- 1) 災害対応委員会のホームページを通じて、災害に関する情報を発信している。また、災害対応グループのメーリングリストを通じてグループ内の意見交換等を行っている。
- 2) 9月鬼怒川氾濫による水害について、約20名の委員等により現地検討会を実施する（2016年3月）。
- 3) 地域拠点委員の充実を図った。
- 4) 日本地球惑星科学連合環境災害対応委員会および防災学術連携体への対応を行っている。
- 5) 日本地球惑星科学連合2015年大会（5月）において、「人間環境と災害リスク」セッションの運営を行った。2016年の同大会については、同セッションのほか「平成27年9月関東・東北豪雨」セッションを提案し、対応中。また、ユニオンセッション「連合は環境・災害にどう向き合っていくのか？」において、本委員会の宇根委員が本学会を代表して講演を行った。2016年の同大会でも同名のセッションが開催される予定であり、対応中。
- 6) 日本学術会議主催学術フォーラム「防災学術連携体の設立と東日本大震災の総合対応の継承」（2016年1月）において、日本地理学会を代表して熊木災害対応委員会委員長が講演を行った。
- 7) 2015年3月の春季学術大会（日本大学）で実施したシンポジウム「はたらく地理学—防災分野における地理学出身者の活躍と課題—」の記事をE-journal GEO 第10巻第1号に掲載した。
- 8) 2016年3月の春季学術大会（早稲田大学）において、公開シンポジウム「近年の災害が提起したハザードマップの課題—工学と地理学の視点から—」を実施する。

(5) 地理教育公開講座委員会

委員長：田部俊充

委員：池下 誠、大高 皇、小口久智、佐藤崇徳、永田忠道、山中正則、西岡尚也、日原高志、深瀬浩三、松浦直裕、山内洋美、吉田 剛

地理教育公開講座は、広く一般社会に地理学・地理教育の普及・啓発を目的に、地理教育専門委員会傘下の地理教育公開講座委員会が主催して、春・秋季学術大会時に開催している。今年度も世界地誌学習に焦点をあてて開催された。

2015年春季学術大会（日本大学文理学部）では、第27回講座として、「東南アジア&オセアニア世界地誌Q&A」をテーマに、菊地俊夫（首都大）、吉田剛（宮城教育大）、池下 誠（練馬区立開進第一中）の報告後、コメンテーターとして、吉田和義（創価大）、卜部勝彦（日本大）が登壇し、活発な意見交換が行われた。コーディネーターは田部俊充（日本女子大）であった（参加者60名）。

2015年秋季学術大会（愛媛大学）では、第28回講座として「南アジア&アフリカ世界地誌Q&A」をテーマに、友澤和夫（広島大）、高木 優（神戸大学附属中等教育学校）、濱野 清（文部科学省）の報告後、コメンテーターとして、鴛原 進（愛媛大）、山内洋美（宮城県塩釜高）が登壇し、熱心な意見交換が行われた。企画趣旨・総括は田部俊充（日本女子大）、コーディネーターは永田忠道（広島大）であった（参加者46名）。

公開講座の成果を公表するために、日本地理教育学会学会誌『新地理』に発表内容を掲載した。また、参加者の拡大をめざし教科書会社HPや新聞社HP等への案内掲載を実施した。今後、地理学者と小中高の現場教員の連携をはかり、参

加数をどう増やすか、世界地誌以外のテーマにどのようにアプローチするかが課題である。本講座は会員以外にも無料公開されており、公開講座を地道に継続する意義は大きいと考える。

(6) GIS 学術士資格委員会

委員長：村山祐司

委員：碓井照子、宇根 寛、小口 高、鈴木厚志

本年度は委員会を3回開催した。第1回は2015年6月28日(日)10時30分～12時、第2回は、2015年10月3日(土)10時30分～12時に開催し、GIS学術士認定、GIS学術士(見込み)からGIS学術士への変更認定、GIS専門学術士認定、GIS学術士(見込み)認定証発行、GIS学術士実績証明団体認定科目審査、GIS専門学術士実績証明団体認定科目審査などについて審議を行った。第3回は、2016年2月13日(土)10時30分～11時30分に開催し、GIS学術士認定、GIS専門学術士認定、GIS学術士(見込み)認定証発行、GIS学術士実績証明団体認定科目審査、GIS学術士実績証明団体継続科目報告、GIS専門学術士実績証明団体認定科目審査、および2016年度の委員会開催日程について審議を行った。また、申請者を増やす方策、2016～2018年度の委員会構成などについて検討した。

(7) ジオパーク対応委員会

委員長：菊地俊夫

委員：青木賢人、有馬貴之、岩田修二、金田章裕、小泉武栄、河本大地、チャクラバルティール・アビック、中井達郎、新名阿津子、宮原育子、目代邦康、柚洞一央、渡辺悌二

ジオパークに関する学術的な議論を深め、各地のジオパークの活動を支援し、活性化するよう活動を進めている。本年度から新規に青木賢人、チャクラバルティール・アビックを委員として選出した。また、学術大会時に委員会を2回開催すると共に、以下の取組みを実施した。

- 1) 2015年春季学術大会シンポジウム「ジオパークにおける教育力」を開催した。
- 2) JpGU2015において、日本地質学会等と「ジオパーク」セッションを共催した。
- 3) 秋季学術大会において、巡検「四国西予ジオパークを歩く・見る・聞く」(参加者20名)をオーガナイズした。
- 4) 「大地の遺産百選」選定作業を昨年度から継続して行った。
- 5) 2015年春季学術大会シンポジウム「ジオパークにおける教育力」の発表者を中心に、東京地学協会「地学雑誌」に特集号を掲載(執筆)することを決定した。
- 6) 2016年春季学術大会シンポジウム「ジオパークで考える科学と社会との関係」に向け、準備を行った。

(8) 地域調査士認定委員会

委員長：田林 明

委員：金田章裕、小泉武栄、戸所 隆、星埜由尚

4回の委員会で、主として以下のことを行った。(1)今年度申請のあった者に対して厳正な資格認定審査を行い、2016年2月25日現在で地域調査士29名と専門地域調査士13名の認定を理事長に具申した(学会HPに公表)。(2)大学および大学院から申請のあった科目について審査を行った。(3)地域調査士申請前部分審査の制度に基づく65名の請求者の書類を確認した。(4)卒業論文の認定を行う「認定委員会が指名する者」を11名追加した。(5)専門地域調査士認定における実務経験の評価および地域調査士制度の定着と発展の方策について意見を交換した。

(9) 出版助成委員会

委員長：横山 智

委員：香川貴志、篠田雅人、志村 喬、平井松午、平井幸弘、由井義通

日本地理学会では、2015年6月1日～30日に出版助成対象となる地理学に関する学術図書の募集を実施した。その結果、3点の応募があった。

出版助成委員会の各委員が対象図書に対して0～10点の範囲で評価点をつけるとともに、400字以内で簡潔に記した評価内容を委員長宛てに8月10日までに送付した。なお、委員が共著者となっている図書の応募があったため、共著者となっている場合は、その申請に関しては評価・コメントをしないこととした。

委員長は総合点数を評価者数で割った平均点をもって順位付けし、その集計結果および評価コメントを全委員にメールで送付して再度意見を求めた。その際、3点の応募図書は積極的にその研究成果を社会にアピールすべき内容を含んでおり、優越を付けがたいが、7点以上の高い得点が得られた上位2点を推薦する原案を各委員に伝達した。それに対して指

定期日の8月15日まで特段の異論が無かった。

この選考結果を踏まえて、申請された3件のうち2件をここに推薦する。

出版助成委員会の答申を受け、理事会決定した交付認定者名・選考理由を下記に掲載する。

交付認定者：藤本 潔会員

藤本 潔・宮城豊彦・西城 潔・竹内裕希子編 『微地形学』（古今書院）

本書は、2014年日本地理学会春季学術大会でのシンポジウム「微地形と地理学—その応用と展開—」の発表内容を中心にまとめたものである。また、筆者の一人である田村俊和先生の退職記念出版図書でもある。自然地理学的な研究成果にとどまらず、防災への応用も含め、微地形をテーマに自然と人間との関係が多面的に論じられており、地理学の研究成果として学術的意義は高い。また、「微地形と自然環境」、「微地形と自然災害」、「微地形と人間活動」に分けられた各部には、専門的な「論説」だけではなく、「総説」や「トピック」を配し、より幅広い理解が得られるように工夫されている。これらの点を評価して、本書は本助成の趣旨に十分適うものと判断できる。

交付認定者：山下清海会員

山下清海編『世界と日本の移民エスニック集団とホスト社会』（明石書店）

本書は、編者が代表を務めた科研費基盤研究（A）のメンバーによる共同研究成果をまとめたものである。海外および国内におけるエスニック・コンフリクトやエスニック資源という観点から、ホスト社会における移民問題について議論した論集であるが、II章で全体の研究テーマを読み解くためのキーワードの解説がなされており、一冊の単行本としてうまく編まれている。近年、隣接分野でも移民問題に関する図書が多く刊行されている中、フィールドワークに基づく実証的な研究成果を前面に打ち出した内容となっている本書は、地理学の有用性をアピールすることに大きく貢献しうる。これらの点を評価して、本書は本助成の趣旨に照らし合わせると高く評価できる。

(10)英文叢書編集委員会

委員長：矢ヶ崎典隆

委員：荒井良雄、石川義孝、小口 高、須貝俊彦、春山成子、松本 淳、村山祐司（幹事）

日本地理学会が2011年6月にシュプリンガー・ジャパン（株）との間に取り交わした英文叢書出版覚書に基づいて、本委員会は英文叢書 *International Perspectives in Geography: AJG Library* の刊行事業を行った。今年度は、K. Mizuno and L. Tenpa. *Himalayan Nature and Tibetan Buddhist Culture in Arunachal Pradesh, India* を刊行した。日本における地理学研究の振興と国際社会への発信を目的とした本叢書は本学会の重要な出版事業の一つであるが、原稿の投稿数が減少している。本叢書を発展させるために広報活動を強化することの重要性を確認した。

(11)「小林浩二研究助成」審査委員会

委員長：加賀美雅弘

委員：荒又美陽、漆原和子、竹中克行、村山朝子

申請5件のうち2件の交付が選定された旨、審査委員会の答申を受け、理事会決定した交付認定者名・交付助成金・選考理由を下記に掲載する。

交付認定者：崎田誠志郎会員

交付助成金：25万円

「ギリシャにおける海洋保護区の維持管理構造と小規模漁業への影響に関する地理学的研究」

日本国内において研究の蓄積が少ないヨーロッパの漁業に関する研究であり、ギリシャの小規模漁業の実態をEU域内の漁業政策との対応を踏まえつつ検討しようとする意欲的な内容である。また、申請された助成金の使途について十分な妥当性があると判断される。すでに現地での調査経験があり、協力者も確保されていることからヨーロッパ地域研究としての新たな成果が期待でき、助成にふさわしい申請であると評価する。

交付認定者：小川滋之会員

交付助成金：25万円

「イギリス、ロンドン近郊にみられるハリエニシダ群落の立地特性」

常緑低木であるハリエニシダ群落の立地特性をイギリスの公園での現地調査に基づいて解明しようとする研究であり、地

域生態環境を踏まえたヨーロッパの植物生態についての興味深い内容である。申請された助成金の使途について十分な妥当性があり、植物群落の立地に関する現地調査の準備も整っていることから、ヨーロッパ地域研究としての新たな成果が期待できると判断し、助成にふさわしい申請であると評価する。

(12)「斎藤 功研究助成」審査委員会

委員長：矢ヶ崎典隆

委員：石井久生、河原典史、高橋重雄、丸山浩明

第2回斎藤 功研究助成の申請について慎重に審査し、候補者2名を下記のように決定した。

審査委員会の答申を受け、理事会決定した交付認定者名・交付助成金・選考理由を下記に掲載する。

交付認定者：高橋昂輝会員

交付助成金：25万円

「トロントの高齢ポルトガル系移民による二地域居住と環大西洋生活圏の形成」

トロントは北米を代表する多民族都市であり、申請者はそのポルトガル系社会を対象としたフィールドワークに継続して取り組んできた。本研究はそうした成果を踏まえて着想された企画であり、1960年代から1970年代に移住したポルトガル系移民一世が、退職後、夏季にはトロントに、冬季にはポルトガルに居住するというトランスナショナルな生活形態に着目する。そうした大西洋を越えた移民の行動と生活圏を解明することにより、移民の地理学研究に新たな知見がもたらされることが期待される。

交付認定者：羽田 司会員

交付助成金：30万円

「ブラジル・サンフランシスコ川中流域における灌漑農業の早魃への耐性と技術革新」

早魃の常襲地帯として知られるブラジル北東部の半乾燥地域（セルトン）では、政府による大規模な灌漑事業の進展により新しい農業地帯が形成されたが、早魃対策は依然として重要な課題である。申請者は世界的に重要な早魃の問題に地理学の視点と方法により取り組もうとしており、その社会的意義はきわめて大きい。この研究テーマはかつて斎藤 功氏が主導したもので、その成果を再検討するとともに、新たな研究視座や研究方法を取り入れて、斬新なノルデステ研究が進展することが期待される。

(13)「若手研究者国際会議派遣助成」審査委員会

委員長：石川義孝

委員：春山成子、村山祐司

提出された申請書および申立書に基づき慎重に審査した結果、この助成制度の趣旨に合致し、発表内容が優れている6名を採択者とした。

交付認定者：池田真利子会員、市川康夫会員、上村博昭会員、金 延景会員、小池拓矢会員、坂口 豪会員

(14)選挙管理委員会

委員長：丸山浩明

委員：池田真志、須田昌弥、松村公明、山下亜紀郎（以上幹事）秋山千亜紀、飯塚 遼、太田 慧、大塚直樹、川久保篤志、中臺由佳里

今年度、本委員会は5回選挙管理委員会を開催し、次のような手順で2016～2017年度会長候補者・理事予定者・監事予定者の選出（予備選挙）、会長予定者・代議員の選出（本選挙）、および理事長予定者選挙を実施した。

第1回選挙管理委員会：3月29日（日）に日本大学にて開催。上記予備選挙ならびに本選挙の作業・開票日程を次のように決定した。予備選挙：投票用紙発送7月25日（土）、投票締切10月2日（金）、開票作業10月3日（土）。本選挙：投票用紙・名簿等発送10月24日（土）、投票締切11月20日（金）、開票作業11月21日（土）。

選挙公示を地理学評論第88巻第4号に掲載するとともに、日本地理学会のホームページでも6月25日に電子公告を行った。

第2回選挙管理委員会：7月25日に日本地理学会事務局にて開催。会長・理事・監事候補者選出のための代議員への投票用紙発送を行った。その後、本選挙の準備を実施した。

第3回選挙管理委員会：10月3日に日本地理学会事務局で開催。予備選挙の開票の後、会長候補者・理事予定者・監事予定者に通知文書を作成・発送した。その後、本選挙の準備を実施した。なお、理事・監事候補者の就任確認とその後
の対応については委員長に一任された。

第4回選挙管理委員会：10月24日に立教大学にて開催。本選挙の投票用紙や会員名簿の封入・発送作業を実施した。

第5回選挙管理委員会：11月21日に立教大学にて開催。本選挙の開票ならびに当選者名簿の作成を行った。今回の選挙結果をみると、有権者数2874人に対して投票総数は464で、投票率は16.1%であった。これは前回の14.7%より高いが、前々回の16.2%とほぼ同じで、投票率はほとんど大きな変化がないまま推移しているといえる。

また、委員長の責任のもとで、12月2日（水）に理事長予定者選挙の投票用紙の発送を行い、12月19日（土）投票締切として、12月21日（月）に日本地理学会事務局で開票を行った。その結果を、同日中に理事長宛報告した。

最後に、本選挙に関わる第4・5回選挙管理委員会では、総務委員の方々の御協力を得た。この場を借りて感謝申し上げたい。

8. 研究グループ報告

『地理学評論』第88巻第1号に研究グループの公募を掲載した。2015年2月7日、28日の常任理事会で承認された2015年度の研究グループは30である。それぞれ下記のような活動を行った。

2015年度研究グループ一覧（2015. 2. 28 常任理事会承認）

グループ名	1990	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
近代日本の地域形成	○	○																
乾燥・半乾燥地域			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
都市気候環境						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
土地利用・陸域変化						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
離島地域						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
環境地理教育							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
情報地理								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
流通・消費の地理学								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
中国地理								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
産業経済の地理学								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ネイチャー・アンド・ソサエティ									○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
国際経済・経営									○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
エスニック地理学										○	○	○	○	○	○	○	○	○
地図・地図資料の歴史GIS											○	○	○	○	○	○	○	○
観光地域												○	○	○	○	○	○	○
農業・農村の地理学												○	○	○	○	○	○	○
都市地理学												○	○	○	○	○	○	○
日本における亜高山・高山域の 植生・環境変遷史												○	○	○	○	○	○	○
持続可能な交通システム												○	○	○	○	○	○	○
自然保護問題												○	○	○	○	○	○	○
少子高齢化と地域問題												○	○	○	○	○	○	○
ジェンダーと空間/場所												○	○	○	○	○	○	○
GISと社会													○	○	○	○	○	○
東日本大震災による被災地 の再建にかかわる														○	○	○	○	○
日本アルプスの大規模地すべり														○	○	○	○	○
水と人の地誌														○	○	○	○	○
気候と災害の歴史														○	○	○	○	○
健康地理研究															○	○	○	○
「新しい公共」の地理学															○	○	○	○
都市の社会・文化地理学																○	○	○

(1) 近代日本の地域形成研究グループ

代表者 天野 宏司

2015年度は次の日程で活動を行った。

[第1回集会（研究集会・ビジネスミーティング）] 2015年3月29日（日）15時～17時、於 日本大学文理学部、参

加者 8 名。

今年度 (2015 年度) の活動計画について。

[第 2 回集会 (研究集会)] 2015 年 5 月 30 日 (土)、於 筑波大学東京キャンパス文京校舎 (3 号館 502 教室)、参加者 8 名。

双木俊介: 「明治期東京における市街地開発と借地人の役割」

洪 明真: 「江戸時代における日本橋の職業構成と買物観光の特徴—『江戸買物独案内』による—」

[第 3 回集会 (研究集会・ビジネスミーティング)] 2015 年 9 月 19 日 (日) 15 時~17 時、於 愛媛大学城北キャンパス、参加者約 9 名。

ICHG2015 参加報告: 山根 拓, 中西僚太郎

(2) 乾燥・半乾燥地域研究グループ

代表者 鹿島 薫

新疆ウイグル自治区およびモンゴル共和国を主要調査対象地域として、活動を展開している。

2015 年 12 月に鹿島 薫会員、高村弘毅会員が中国科学院地理学研究所および新疆大学に招聘され渡航し、北京でミーティングを行った。さらに、新疆大学から 11 名、モンゴル国立大学およびモンゴル科学アカデミーから 8 名を招聘し、九州大学ほかにおいて砂漠化防止事業に関する研修コースを実施した。現在、WATARID IV: The Fourth International Conference on Water, Ecosystems and Sustainable Development in Arid and Semi-arid Zones (第 4 回乾燥・半乾燥地域における水、生態系そして持続的な開発に関する国際会議) を 2016 年 10 月東京で開催するため準備を進めている。その詳細については、地理学評論などに掲載を行う。

(3) 都市気候環境研究グループ

代表者 榊原 保志

春季の学術大会で研究グループ例会を開催し、いずれも十数名の参加者があった。

発表者とテーマは以下の通りである。

[春季学術大会例会] 2015 年 3 月 29 日 (日) 13 時~15 時、於 日本大学文理学部。

花井嘉夫・榊原保志 (信州大): 「晴天日における松本・飯田間の気圧分布の特徴」

山添 謙 (日本大): 「東京とその周辺地域における温湿指数に基づく暑熱夜の出現状況」

(4) 土地利用・陸域変化研究グループ

代表者 木本 浩一

2015 年度は、引き続き、IGU/LUCC および GLP との連携を意識した活動を行った。特に、フューチャー・アース (FE) への積極的貢献を模索中である。5 月の日本地球惑星科学連合大会 (JpGU) では、Implementing Human Dimensions Research for the Earth's Future (H-SC03) セッションにおいて、8 月の IGU/Moscow 大会では、LUCC セッションにおいて研究グループのメンバーが報告を行った。モスクワ大会では、セッション後に IGU/LUCC の今後のあり方についてミーティングを行った。また、9 月の日本地理学会秋季学術大会では、三つの報告 (氷見山幸夫 (北海道教育大・名誉): 「我が国におけるフューチャー・アースのための土地利用研究の組織化と具体化」、王 勤学 (国立環境研): 「中国・長江流域の土地利用変化に伴う汚濁負荷流出の評価に関する研究」、木本浩一 (摂南大): 「インドにおける荒蕪地 (Wasteland) の現状と課題」) を得た。次年度は、引き続き、これまで築いてきた国際的なネットワークを国内に還元・共有することを本グループの主たる活動としつつ、グループ研究会を利用した若手研究者の育成にも取り組んでいきたい。

(5) 離島地域研究グループ

代表者 須山 聡

2015 年は日本地理学会の大会に合わせてシンポジウムを 1 回、研究会を 1 回開催した。いずれの研究会でも活発な討論が行われ盛会であった。

[シンポジウム] 「離島の存続可能性」 2015 年 3 月 29 日 (日)、於 日本大学文理学部。

オーガナイザー: 須山 聡 (駒澤大)・平岡昭利 (下関市立大)・宮内久光 (琉球大)

第 1 セッション「離島の全国的動向」座長: 宮内久光 (琉球大)

三木剛志 (日本離島センター): 「わが国における離島振興政策の概要とその展開」

須山 聡 (駒澤大): 「戦後日本における無人化島の生成」

高木 亨 (福島大) : 「三宅島噴火による長期避難からの復興とフクシマの原子力災害」

第2セッション「離島の生活・生産基盤」座長: 中村周作 (宮崎大)

藤永 豪 (佐賀大) : 「離島における生業活動の多様性と複合性—甘蔗モノカルチャー化以前の喜界島のくらし—」

荒木一視 (山口大) : 「食料供給から見た離島の持続可能性」

助重雄久 (富山国際大) : 「「若い力」を活かした島の活性化—民泊・域学連携事業・国内移住の可能性と課題—」

終了後、懇親会を開催した。

なお、シンポジウム報告を E-Journal GEO 10(1)に掲載した。

[研究会] 2015年9月19日(土)、於 愛媛大学城北キャンパス。

淡野寧彦 (愛媛大) : 「愛媛県宇和島市日振島における産業と暮らし」

終了後、懇親会を開催した。

(6) 環境地理教育研究グループ

代表者 朴 恵淑

2015年度は、主な活動は下記の通りである。

1) 研究集会

2015年3月29日(日) 13時~15時、於 日本大学文理学部。15時~17時、水と人の地誌研究グループと合同研究集会。

谷口智雅 (三重大) : 「水を素材とした武蔵野の地誌巡検」

朴 恵淑 (三重大) : 「実践的な環境地理教育の提言」

2015年9月19日(土) 15時~17時、水と人の地誌研究グループと合同開催、於 愛媛大学城北キャンパス。

2) シンポジウムの開催

[三重大学ユネスコスクール研修会/シンポジウム2015] 2016年1月30日(土) 13時~16時30分、於 三重大学環境・情報科学館1階ホール、参加者約150名。文部科学省持続可能な開発のための教育(ESD)推進事業「三重ブランドのユネスコスクールコンソーシアム」の平成27年度事業報告、三重大学環境コンテストの入賞者の表彰、沖縄科学技術大学院大学プレジデント・オフィス理事長補佐浅井孝司氏による「ユネスコESD世界会議の成果と取組」の基調講演、韓国世宗大学校電子情報通信工学部長教授朴己煥氏による「韓国の環境教育と大学の役割」と天津師範大学都市と環境研究学院教授の方晶氏による「中国天津師範大学の環境・国際理解教育」の講演、県内ユネスコスクール活動の事例報告を行い、中学・高校・大学の環境教育関係者、学生、行政などの参加があった。

(7) 情報地理研究グループ

代表者 原 真志・和田 崇

1) 研究会の開催

日本地理学会春季学術大会(日本大学)において、以下の通り研究報告会を開催した。

[第16回例会] 2015年3月29日(日) 13時~15時、於 日本大学文理学部。

秦 洋二 (流通科学大) : 「小規模移動販売事業の持続可能性—移動スーパーとくし丸を事例に—」

ビジネスミーティング: 『インターネットと地域』出版に向けた調整を行った。

2) IGU2015モスクワ大会(2015年8月16~21日)への参加・報告

本研究グループの構成メンバーから1名が「情報地理コミッション」の報告者として参加した。

3) 『コンテンツと地域—映画・テレビ・アニメ—』の刊行

2015年12月に本研究グループの研究成果をまとめた『コンテンツと地域—映画・テレビ・アニメ—』をナカニシヤ出版から刊行した。

4) ホームページの活用

ホームページを運営し、研究グループの活動紹介などに利用している。

5) メーリングリストの運用

メーリングリストを運営し、情報交換などに利用している。

(8) 流通・消費の地理学研究グループ

代表者 土屋 純

[第1回研究集会] 2015年3月29日(日)、於 日本大学文理学部。

土屋 純 (宮城学院女子大) : 「東日本大震災後における東北地方の流通システム」

[その他]

E-journal GEO において流通特集論文を発刊した。
メーリングリストによる情報交換を行った。

(9)中国地理研究グループ

代表者 小野寺 淳

昨年度に開催した国際シンポジウム『ポスト満洲としての中国東北—フィールド調査に基づく地域像再考—』の各発表の概要や総括を記述した報告が E-journal GEO に掲載され、当研究グループの多くのメンバーが参加した研究活動の成果を改めて示すことができた。また、昨年度末の春季学術大会では、李 小妹「深圳のテーマパークからみる中国都市空間の表象と実践」と高木秀和「現地調査と「大旅行」記録から中国にアプローチする—愛知大学国際中国学研究センターと東亜同文書院大学記念センターの取り組みを事例に—」の報告を得て、有意義な議論を行うことができた。

来たる 2016 年 3 月の早稲田大学で開催される春季学術大会においては、研究グループ集会を開いて二人の研究者から研究発表・話題提供をしていただこうと企画している。一人は、謝 陽（お茶の水女子大・大学基幹研究院研究員）であり、予定している発表テーマは「農地生産体制変換下の生漆生産—中国湖北省恩施州の漆畑—」である。もう一人は、中国広州の中山大学教授であり、この数か月間は東京大学客員研究員も兼ねている劉 雲剛であり、「中国における都市化の動向と課題—地方都市からのアプローチ—」というテーマでの研究発表・話題提供の予定である。さらに、今後のグループ活動の展望についても、意見交換をすることになるであろう。

(10)産業経済の地理学研究グループ

代表者 末吉 健治

産業経済の地理学研究グループは、2015 年度の活動を下記のように行った。

[第 14 回研究集会] 2015 年 3 月 29 日（日）15 時～17 時、於 日本大学文理学部、参加者 23 名。

森嶋俊行（東京大・学術研究員）：「広域関東圏の地域産業集積の現在(1)—日立地域—」
岡部遊志（東京大・学術研究員）：「広域関東圏の地域産業集積の現在(2)—両毛地域—」
古川智史（東京大・学術研究員）：「広域関東圏の地域産業集積の現在(3)—長岡地域—」

[第 15 回研究集会] 2015 年 9 月 19 日（土）13 時～15 時、於 愛媛大学城北キャンパス、参加者 20 名。

塚本僚平（九州産業大）：「今治タオルのブランド化と産地維持」
栗林 慶（筑波大・院）：「福井県鯖江市における眼鏡枠生産の変容」

本グループが対象とする事象に関する研究内容の深化は、社会的要請が高いものであることには引き続き変わりはない。次年度以降の活動方針としては、これまでの活動成果を踏まえて、秋季学術大会において研究グループとしてシンポジウムを開催する予定である。また、成果をベースとした出版等総合化していくことを考えている

(11)ネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループ

代表者 渡辺 和之

2015 年 6 月 13 日に東京・池袋のキッチン風で、橋本 操（筑波大・院）が「シカ会」と題して発表した。シカの個体数増加に伴う被害を踏まえ、ジビエ料理として有効利用する方法とその課題についての発表で、総勢 22 名の参加があった。また、2016 年 3 月 22 日に早稲田大学で行われる日本地理学会では、当研究グループ主催のシンポジウム「山岳地域における資源利用と観光化—ヒマラヤ・ヨーロッパ・日本—」を行う予定である。発表者は次の通りである。渡辺和之（立命館大・非）：「山岳地域のcommons：観光化・生業の現在」、朝日克彦（信州大）：「ヒマラヤにおける氷河融解水の利用」、白坂 蕃（東京学芸大・名誉）：「アルプス南麓イタリア、フェアナークト村における移牧と観光化」、池谷和信（民族学博物館・総研大）・渡辺和之：「富士山麓における茅場利用と恩賜林組合」、コメント 中辻 亨（甲南大）。

(12)国際経済・経営地理学研究グループ

代表者 シュルンツェ ロルフ・平 篤志

国際経済・経営地理学研究グループは、2015 年度、下記のような活動を行った。

[第 15 回研究集会] 2015 年 3 月 29 日（日）13 時～16 時、於 日本大学文理学部。

春季大会時、下記国際シンポジウムを開催した。

シンポジウム Spaces of creativity, diversity and global management

オーガナイザー：平 篤志（香川大）、シュルンツェ ロルフ（立命館大）

発表者：

Andrew Jones (City Univ. London): Coping with global challenges: The significance of intercultural management practices

Lech Suwala (Humboldt Univ. Berlin): Bonding and bridging creativity, innovation, and entrepreneurship: A systemic approach to innovation management

Rolf Schlunze (Ritsumeikan Univ.): Does Chinese entrepreneurs' guanxi networking matter to business success in Japan?

William Baber (Kyoto Univ.): Success of Japan-based North American managers: Global places of negotiation for cultural synergy.

Taira Atsushi (Kagawa Univ.): Overseas operations of local firms and cross-border management: A case study of Japanese local firms.

コメント

Kamiya Hiroo (Kanazawa Univ.): Sustaining overseas business ecosystems by intercultural competence nurtured in the global expat community.

上記につづき、パネルディスカッションを行った。海外からの気鋭の研究者の発表を中心にシンポジウムを開催し、多くの参加者を得て実りあるシンポジウムとなった。ただ、同時に多数のシンポジウムや一般発表があったため、それらの重複がなければさらに多くの参加者が期待できたと思われる。

〔第16回研究集会〕2015年9月19日（土）15時～17時、於 愛媛大学城北キャンパス。

1. 研究発表

発表者：

丹羽孝仁（東北大・院）：「宇都宮市における地域産業振興の動向と課題」

鎌倉夏来（東京大・院）：「日系化学企業における研究開発機能のグローバルな空間的分業の構築とマネジメント」

2. ビジネスミーティング（科研による共同研究の申請について）ほか

当グループ関係者は、当研究集会を含め、当研究グループ代表がその代表を務める国際的研究グループ SIEM(Spaces of International Economy and Management)と連携して、国内外の学会・研究会で積極的に研究発表を行っている。

(13)エスニック地理学研究グループ

代表者 大石 太郎

本研究グループの2015年度の主な活動として、エスニック地理学研究グループのメーリングリストにより、エスニック地理学に関する情報交換を行うとともに、春季学術大会において下記のように研究集会を実施した。また、2014年度秋季学術大会のシンポジウム「エスニック集団とホスト社会—日本社会の多国籍化に向けて—」で報告した成果をもとに、本研究グループのメンバーが中心となって執筆した『世界と日本の移民エスニック集団とホスト社会—日本社会の多民族化に向けたエスニック・コンフリクト研究—』（山下清海編、明石書店刊）が本学会の出版助成を得て近く刊行される予定である。

〔研究集会〕2015年3月29日（日）、於 日本大学文理学部、参加者19名。

山口 覚（関西学院大）：「グローバルな先祖調査とディアスポラ・ツーリズム—スコットランドの事例を中心に—」

コメンテーター：福田珠己（大阪府立大）

福本 拓（宮崎産業経営大）：「エスニック資本の観点からみたエスニック空間形成の過程—大阪市生野区の事例—」

コメンテーター：杉浦 直（岩手大・名誉）

(14)地図・絵図資料の歴史 GIS 研究グループ

代表者 藤田 裕嗣

2015年度の主な活動としては、以下のような研究集会を開催し、活発な議論を行った。

〔第13回研究集会〕2015年3月29日（日）、於 日本大学文理学部、参加者約20名。

南部孝之（相馬郷土研究会）：「相馬中村城下町の復原図作成の試み—慶応元年中村城下図を中心に—」

〔第14回研究集会〕2015年9月19日（土）、於 愛媛大学城北キャンパス、参加者約35名。

土平 博（奈良大）：「大和郡山城下における寛政10年の検地と町割図—歪みと制度—」

堀 健彦（新潟大）：「新発田城下町関係絵図—歴史 GIS 構築にむけて—」

小野寺 淳 (茨城大) ・永井 博 (茨城県立歴史館) ・田中耕市 (茨城大) ・小橋雄毅* (茨城大・院) :
「水戸城下絵図の GIS 分析」

(15) 観光地域研究グループ

代表者 フンク カロリン

1) 2015 年度研究集会の開催

[第 4 回研究集会] 2015 年 9 月 19 日 (土)、於 愛媛大学城北キャンパス、参加者約 20 名。

瀬戸内に関する研究発表、研究グループの活動についての意見交換、IGU についての情報交換、ビジネスミーティングなどを行った。

馬淵悠生 (愛媛大・院) ・井口 梓 (愛媛大) : 「しまなみ海道における自転車観光者の行動—愛媛県を事例に—」

朝水宗彦 (山口大) : 「周防大島における体験型修学旅行」

フンク・カロリン (広島大) ・許 雅琦 (広島大・院) : 「しまなみ海道の新しい観光」

[第 5 回研究集会] 2016 年 3 月 22 日 (火)、於 早稲田大学教育学部、参加者約 30 名(予定)。

観光地理学を学ぶ学生に対する発表の場の提供、ならびに観光地理学者間で教育動向について意見交換を行うため、学生論文発表会を行う。また、研究グループの活動などについて検討し、ビジネスミーティングを行う。

2015 年度観光地理学系学生論文発表会

中井優太郎 (首都大・院) : 「北海道長沼町の農家民宿における農業体験の効果—教育的効果の分析を中心として—」

安村健亮 (筑波大・院) : 「北海道函館市におけるコンテンツツーリズムの展開」

アコマトベコワ・グリザット (立教大・院) : 「ポスト社会主義国キルギスにおける観光レクリエーションおよび観光動機の変容—温泉施設・別荘地の利用者を中心に—」

2) IGU 観光レジャー部会との交流

グループの代表者が、2016 年度の IGU 大会プレコンGRESSおよび IGU 大会 (北京) について、セッション等の状況を報告した。観光地域研究グループとして「Nature based tourism in Asia」というセッションを管理することを確認した。

(16) 農業・農村の地理学研究グループ

代表者 森本 健弘

1) 例会を 2 回開催した。

[春季学術大会] 2015 年 3 月 29 日 (日)、於 日本大学文理学部、参加者 15 名。

①橋本 操 (筑波大・博士特別研究員) より話題提供「獣害発生要因と集落特性—長野県飯田市の事例から—」を行い、質疑応答・意見交換した。

②IGU 持続的農村システム研究委員会について (金 料哲 (岡山大))。

2014 年 IGU 地域大会 (8/18~22、ポーランド・クラクフ) の成果を報告した。

2014 年の年次会議 (8/24~9/3、ルーマニア・ブカレスト) の成果を報告した。

2015 年の年次会議 (7/27~8/2) について情報提供した。

③当グループの活動について意見交換した。Facebook ページを作成し、グループ内外での情報交換、情報蓄積を行うことを決めた。

[秋季学術大会] 2015 年 9 月 19 日 (土)、於 愛媛大学城北キャンパス、参加者 25 名。

①マーティン・フィリップス教授 (英国レスター大学) 講演「ルーラルジェントリフィケーションの国際比較研究にむけて」を実施、質疑応答・意見交換した。

②IGU 持続的農村システム研究委員会の活動について (金 料哲 (岡山大))

2015 年の年次会議 (7/27~8/2、ポルトガル) の成果を報告した。

2016 年の年次会議 (7/17~23、ベルギー)、同年 IGC (8/21~25、北京) における同委員会のセッション、2017 年年次会議 (4 月後半、ベトナムを検討中) について情報提供した。

③当グループの活動について意見交換した。

2) 国際地理学連合持続的農村システム研究委員会と連携して活動し、その情報を日本の関係者に広く伝えた。本グループメンバーの金 料哲 (岡山大) は同委員会の共同代表として活動した。

3) グループのメーリングリスト及び Facebook ページによって、グループの活動、農業・農村に関わるさまざまな話題の情報を提供した。特に後者は非会員への訴求力があり、今後も強化してゆきたい。

(17)都市地理学研究グループ

代表者 阿部 和俊

[シンポジウム] 2015年3月29日(日)、於 日本大学文理学部、参加者約90名。

シンポジウム「1990年代以降の日本の都市システムの構造的変化」を都市科研グループ(代表・日野正輝)と共同開催した。

阿部和俊(愛知教育大・名誉):「都市システム研究の成果と課題」

松原 宏(東京大):「世界都市・東京」

長尾謙吉(大阪市立大):「日本の都市システムと第二位都市・大阪」

田代雅彦(九州経済調査協会):「広域中心都市・福岡—日本第4の都市へ—」

日野正輝(東北大):「広域中心都市・仙台」

戸所 隆(高崎経済大・名誉):「首都圏外縁都市・前橋 高崎における都市システムの変化動向」

豊田哲也(徳島大):「沿海都市・徳島市における近年の経済変化と開発計画」

寺谷亮司(愛媛大):「北海道の地方中心都市の変化動向—滝川市を中心に—」

本シンポジウムは20世紀の後半、日本の都市地理学のなかで重要な地位を占めるようになった都市システム研究の総括を行ったものである。日本の大都市の東京・大阪、広域中心都市の福岡・仙台、県庁所在都市、地方中心都市のレベルでの研究報告を得た。

[シンポジウム] 2015年9月19日(土)、於 愛媛大学城北キャンパス、参加者約75名。

シンポジウム「20世紀の都市地理学から21世紀の都市地理学へ」を都市科研グループ(代表・日野正輝)と共同開催した。

由井義通(広島大):「郊外研究の新たな展開—郊外住宅地の衰退と活性化—」

西原 純(静岡大):「昭和の大合併、平成の大合併政策後の新しい自治体と地理学」

村山祐司(筑波大):「都市地理学方法論の発展—GISの貢献—」

水野 勲(お茶の水女子大):「都市地理学における計量的研究のいくつかの論点」

古賀慎二(立命館大):「日本における都市内部構造研究の成果と課題」

神谷浩夫(金沢大):「都市社会地理学の発展と都市地理学」

日野正輝(東北大):「ポスト成長都市の地理学的研究の課題」

本シンポジウムはこれまでの一連の都市地理学のシンポジウムの成果を踏まえて日本の都市地理学分野(春に行われた都市システム研究を除く)の研究成果の総括と今後の課題についての報告を得た。そして、都市地理学の日本学派の成立の可能性についての議論も行った。

(18)日本における亜高山・高山域の植生・環境変遷史研究グループ

代表者 沖津 進

1) 2015年度活動

2014年度の活動を各自発展させ、研究グループメンバーの個人活動(野外調査、研究発表、論文執筆など)を中心とした。

2) 研究集会

日程調整が困難だったため、2015年春季学術大会では研究集会は開催できなかった。その後、メールで随時協議を行い、研究の現状、将来への発展について意見交換した。2015年11月および2016年2月に、千葉大学園芸学部および同医学部において沖津による講演会を開催した。

3) 主な野外調査(試料採取・植生調査等)

2015年5月~12月:御坂山地(苅谷、西内)、6月:南魚沼市(百原)、7月:赤石山脈(安田)、8月:後立山山脈(安田)、9月:立山(百原)、10月:田原市(三宅)など計10件程度。

4) 主な研究発表

①2015年8月、国際第四紀学連合大会(INQUA)。Suzuki, T. and Kariya, Y. (2015) Late Pleistocene and Holocene landslide lakes in the Misaka Mountains, southern Fossa Magna, Central Japan.

②2015年8月、国際第四紀学連合大会(INQUA)。Momohara, A. (2015) Distribution of conifers and deciduous broadleaved tree taxa in the Last Glacial Maximum in Japan based on plant macrofossil records.

③2016年2月、砂防学会研究会中間成果報告会。山田隆二・苅谷愛彦・佐野雅規・李 貞・中塚 武(2016):「南アルプス・ドンドコ沢から産出した埋没ヒノキの酸素同位体比を用いた年輪年代測定」など計15件程度。

5) 主な論文・報告

①松井哲哉・中尾勝洋・津山幾太郎・比嘉基紀・大丸裕武・小南裕志・大橋春香・安田正次・中園悦子・小出 大・田 中信行 2015. 気候変動が天然林の潜在生育域に与える影響の評価と温暖化適応策. 日本不動産学会誌 29(1): 52-58.

②Takaoka, S. 2015. Preliminary observations on spatial variation in the biotic and abiotic properties of high mountain ponds in central Japan. *Studies in the Humanities* 97: 171-186.

③荻谷愛彦・黒沼保子・原山 智 2015. 黒部川源流、水晶岳西面の高天原地すべり堆積物から得た材化石の14C年代測定と樹種同定. 専修自然科学紀要 46: 1-14.

④Momohara, A. 2015. Stages of major floral change in Japan based on macrofossil evidence and their connection to climate and geomorphological changes since the Pliocene. *Quaternary International*, in press. doi:10.1016/j.quaint.2015.03.008 など計10件程度。

(19)持続可能な交通システム研究グループ

代表者 土谷 敏治

1) 研究例会を4回開催した。

[第1回研究例会] 2015年5月10日(日)13時~17時、於 駒澤大学駒沢キャンパス、参加者8名。

井上 学 (平安女学院大): 「バスマップサミット関西の開催報告およびアンケート結果」

土谷敏治 (駒澤大): 「ひたちなか海浜鉄道の新駅高田の鉄橋駅に関するアンケート調査結果」

[第2回研究例会] 2015年6月13日(土)、13時~17時、於 青山学院大学青山キャンパス、参加者15名。

峯村いづみ: 「鉄道が地域にもたらす効果と可能性について: 沖縄本島を事例として」

[第3回研究例会] 2015年7月5日(日)、13時~17時、於 駒澤大学駒沢キャンパス、参加者10名。

山田淳一 (立正大): 「森林公園バスマップ作成について」

[第4回研究例会] 2015年9月19日(土)15時~17時、於 愛媛大学城北キャンパス、参加者13名。

活動報告と今後の活動計画について

2) 日本地理学会秋季学術大会でグループ発表を行った。

田中健作・井上 学 (平安女学院大): 「県境地域における県際バス路線と沿線自治体間による運営枠組みの形成—中部地方の事例—」

今井理雄 (駒澤大): 「公共交通分野に対する市民の主体的な参画とその背景—交通地理学からのアプローチ—」

土谷敏治 (駒澤大): 「新駅開業に対する利用者と市民の評価」

3) 「学生を対象としたウェブアンケート」を実施した。

7月24・25日(金・土)に東洋大学で開催の日本モビリティ・マネジメント会議において報告した。

4) 茨城県ひたちなか市産業交流フェアの公共交通ブースで公共交通利用促進活動と、来場者に対して、日常の移動行動についてのアンケート調査を実施した。

10月31日(土)、11月1日(日)10時~15時30分、ひたちなか市総合運動公園、調査参加者6名。

(20)自然保護問題研究グループ

代表者 青木 賢人

本研究グループでは、2015年度には春季学術大会(日本大学文理学部)時のシンポジウム「自然保護問題への地理学的アプローチ—辺野古問題とリニア建設問題—」および巡検「いま東京でできる自然保護—エネルギー・減災対策の最前線を見る—」の主催、および秋季学術大会(愛媛大学城北キャンパス)時のグループ発表「自然資源利用の倫理性」を行った。本研究グループでは、自然保護を広い視野からとらえ、シンポジウムで取り扱った狭義の自然保護問題の他、巡検で扱ったエネルギー問題、グループ発表で行った資源利用など、自然保護に係る広義の課題を議論している。

シンポジウムおよび巡検では、非学会員にも参加していただくことで、日本地理学会内における自然保護問題への意識発揚と、地理学の社会への貢献・普及に努めるほか、他分野や自然保護活動の現場との学術交流に努めてきた。

このほかにも、日常的にメーリングリストを通じた意見交換を行っていることに加え、シンポジウム等を設定しない大会時においても研究集会やまとまった発表を行うことで、研究交流を続けている。

(21)少子高齢化と地域問題研究グループ

代表者 宮澤 仁

2015年4月からは科学研究費補助金 基盤研究(A)の採択を受けて「社会保障の地理学」による地域ケアシステム

構築のための研究」に活動の軸を移している。愛媛大学での日本地理学会大会時に科研のビジネスミーティングを行った。その他、研究グループの Web サイトならびにメーリングリストを用いて情報発信・情報交換を行った。第8回集会ならびにビジネスミーティングを3月22日に共催する予定である。

[第7回集会] 2015年3月29日(日) 13時~15時、於 日本大学文理学部、参加者 17名。「新しい公共」の地理学研究グループとの共催。

畠山輝雄(鳴門教育大):「廃校跡地を利用したデイサービスによる過疎集落維持の取り組み—徳島県三好市三野地区大刀野山地域を事例に—」

[科研ビジネスミーティング] 2015年9月19日(土) 15時~17時、於 愛媛大学城北キャンパス、参加者 15名。

[第8回集会(予定)] 2016年3月22日(火) 13時~15時、於 早稲田大学教育学部。

畠山輝雄(鳴門教育大)・中村 努(高知大)・西 律子(明治学院大・非)・三浦尚子(お茶の水女子大・院):「自治体による地域包括ケアシステム構築に関わるアンケート調査結果報告」

科研ビジネスミーティング

(22)ジェンダーと空間/場所研究グループ

代表者 影山 穂波

1) 研究会の開催

[日本地理学会春季学術大会] 2015年3月29日(日) 13時~15時、於 日本大学文理学部。

洪 美怜(お茶の水女子大・学生):「在日コリアンの「ホーム空間」における女性の働き—東京都江東区の一事例を通して考える—」

日本におけるエスニシティの問題の特徴の一つとして在日コリアンの問題を挙げることができる。彼/彼女らの生活の拠点となる居住のための空間をめぐる闘争について、聞き取り調査をもとに分析をした発表がなされた。具体的な調査に関する質疑応答とともに、今後の展開に関して参加者から多くの意見が寄せられた。

[日本地理学会秋季学術大会] 2015年9月19日(土) 13時~15時、於 愛媛大学城北キャンパス。

影山穂波(椋山女学園大):「戦後の雑誌にみる戦争花嫁の表象」

戦後占領下におかれた日本を統治するために来日したGHQと日本人女性との間で多くの婚姻関係が生じている。そこで1950年代の雑誌記事を中心に、「戦争花嫁」がいかに表象されているのかを検討した。当時の状況との関連や、実際の経験者への調査の方向性など、参加者から多くの意見が寄せられた。

2) 本研究グループが管理するホームページを通じて活動内容を掲載し、情報発信に努めた。

(23)GIS と社会研究グループ

代表者 若林 芳樹

GIS と社会研究グループは、2015年度の活動を次のように行った。

1) 研究集会の開催

[第1回研究集会] 2015年3月29日(日) 13時~15時、於 日本大学文理学部、参加者 15名。

鈴木晃志郎(富山大):「電子地理情報倫理をめぐる地理学的課題」

吉永明宏(江戸川大):「GIS利用の「倫理」—倫理学の観点から—」

[第2回研究集会] 2015年9月19日(土) 13時~15時、於 愛媛大学城北キャンパス、参加者 7名。

青木和人(オープンデータ京都実践会):「地域活性化へ市民参加型オープンデータが果たす意義」

田中雅大(首都大・学振特別研究員):「参加型GIS研究におけるエンパワメント概念の整理—生態学的視点からの展望—」

2) 出版計画

研究グループの活動成果を単行本にとりまとめて次年度中に出版するために、執筆者と分担テーマを決定して準備を開始した。

3) ホームページでの情報発信

研究グループのホームページを作成し、活動内容について情報発信に努めた。

(24)東日本大震災による被災地の再建にかかわる研究グループ

代表者 豊島 正幸

1) 2016年日本地理学会春季大会「震災記録」シンポジウム(主催:日本地理学会理事会)を共催、後援:岩手県山田町、

実践女子大学。

テーマ：東日本大震災での避難行動と避難生活—岩手県山田町の津波被災地での地理学的「震災記録」—

趣旨：これからの防災体制や防災教育に資するため、今次の津波による防潮堤の破壊、避難行動、避難所生活等の震災初期の一連の行動と現象を時空間的に解析し、地理学的「震災記録」として伝承する。

日時：2016年3月22日（火）9時～12時、於 早稲田大学教育学部。

オーガナイザー：岩船昌起（鹿児島大）・田村俊和（東北大・名誉）・松井圭介（筑波大、日本地理学会理事）、司会者：松井圭介・久保純子（早稲田大）、発表者：①岩船昌起・田村俊和・松井圭介、②瀬戸真之（福島大）・田村俊和・岩船昌起、コメント：黒木貴一（福岡教育大）、③岩船昌起・瀬戸真之・田村俊和、コメント：村山良之（山形大）、④阿部 隆（東北大・院）、コメント：森 直子（NIRA）、⑤白尾美佳（実践女子大）・水野いずみ（実践女子大）・岩船昌起、コメント：駒木伸比古（愛知大）、指定コメンテーター：鈴木比奈子（防災科学研究所）、池谷和信（民族学博物館）、増田 聡（東北大）、須賀恭子（実践女子大・名誉）、佐藤孝雄（山田町役場）

2) 共同研究等の推進

①岩船昌起（鹿児島大）ほか：山田町での避難行動および避難生活の実態解明にかかわる総合研究。山田町東日本大震災記録伝承事業（2016年3月31日まで）。

②関根良平（東北大）・小田隆史（宮城教育大）・庄子 元（宮城教育大）・磯田 弦（東北大）：津波被災地における水産経済の再建に関する地理学的研究—水産業の連関構造に注目して—。公益財団法人国土地理協会第15回学術研究助成（平成27年度）

(25) 日本アルプスの大規模地すべり研究グループ

代表者 荻谷 愛彦

1) 研究集会の開催

日程調整が困難だったため、2015年秋季学術大会では研究集会は開催できなかった。2016年春季学術大会において研究集会を開催する予定である。発表者は、齋藤 仁（関東学院大学）・吉田英嗣（明治大学）（演題未定）。参加者は20名程度の見込み。

2) 主な野外調査

4～12月：南アルプスにおける地形地質・植生調査（高岡・荻谷ほか）。8月～10月：北アルプスにおける地形地質調査（高岡、荻谷ほか）など。

3) 主な成果公表

①Takaoka, S. 2015. Preliminary observations on spatial variation in the biotic and abiotic properties of high mountain ponds in central Japan. *Studies in the Humanities* 97: 171-186.

②荻谷愛彦・黒沼保子・原山 智 2015. 黒部川源流、水晶岳西面の高天原地すべり堆積物から得た材化石の¹⁴C年代測定と樹種同定. *専修自然科学紀要* 46: 1-14.

③齋藤 仁 2015. 地すべりの広域的解析における地理情報システム(GIS)の応用. *E-journal GEO* 10(1): 1-5.

④Matsushi, Y., Kariya, Y., Harayama, S. and Matsuzaki, H. 2015. Dating deep-seated catastrophic landslides in Japanese Alps by terrestrial cosmogenic ¹⁰Be: An implication to the influence of climate change in shaping mountainous landscapes. XIX INQUA Congress. など

4) メーリングリストの活用

本グループ専用のメーリングリストを開設し、情報交換、議論、話題提供などに活用した。

(26) 水と人の地誌研究グループ

代表者 宮岡 邦任

1) 研究集会の開催（開催日時、開催場所）

[第22回研究集会] 2015年2月28日（土）、9時～17時、於 多摩川・西武多摩川線沿線。

[第23回研究集会] 2015年3月29日（日）、15時～17時、於 日本大学文理学部。

[第24回研究集会] 2015年5月1日（金）、10時～18時、於 沖永良部島（鹿児島県）。

[第25回研究集会] 2015年8月2日（日）、17時～20時、於 東京駅周辺。

[第26回研究集会] 2015年8月15日（土）、15時～17時、於 IGU（モスクワ大会）。

[第27回研究集会] 2015年9月19日（土）、15時～17時、於 愛媛大学。

[第28回研究集会] 2015年10月2日（金）、20時～22時、於 稲田堤駅周辺。

[第29回研究集会] 2015年12月19日(土)、10時~17時、於 早稲田大学・神楽坂・飯田橋。

2) 学会発表

Masatoshi Motoki and Hagiwara, Go W. : The change of conservation of traditional springs : the case study of the Okinoerabu Island, Kagoshima Prefecture, Japan など4件

3) 巡検

2015年3月30日(月)、9時~17時、「武蔵野の水と人の地誌」

JR 府中本町駅(集合) — JR 南武線(鉄道移動; 鉄橋より多摩川川原観察) — JR 南多摩駅—多摩川—西武多摩川線 是政駅(鉄道移動予定) — 西武多摩川線多磨駅—旧関東村・東京外国語大学—調布飛行場—野川公園—国分寺崖線—西武多摩川線新小金井駅(鉄道移動予定) — JR 武蔵境駅—境山野緑地(独歩の森) — 玉川上水—品川用水跡—JR 三鷹駅 — JR 吉祥寺駅—井の頭池

参加者 35名、案内者 6名。

4) その他

MLによる意見および情報交換

(27)気候と災害の歴史研究グループ

代表者 三上 岳彦

2015年度は、春季学術大会例会で以下の研究発表が行われた。

2015年3月29日(日) 13時~15時、於 日本大学文理学部、参加者 10名。

丸本美紀(お茶の水女子大・院)・福岡義隆(立正大・名誉):「奈良と京都における601~1200年の気象災害—気象史料からの復元—」

平野淳平(防災科学研):「古日記天候記録による18世紀以降の夏季気温変動の復元」

なお、2016年春季学術大会例会では、米国マサチューセッツ大学の著名な古気候研究者 R.S.Bradley 教授の基調講演を中心とする国際研究例会を計画しており、それに向けた準備が進行中である。

(28)健康地理研究グループ

代表者 埴淵 知哉

2015年度は、以下のとおり活動を行った。

[第1回研究集会] 2015年3月29日(日)、於 日本大学文理学部、参加者 12名。

本研究グループにおける最初の研究集会を「健康地理に関連する研究紹介」をテーマとして開催した。また、ウェブサイトとメーリングリストによる情報発信・交換と、今後の研究集会などの活動方針について検討した。報告者とタイトルは以下のとおり。

荒堀智彦(首都大・院):「感染症防疫・健康危機管理と地理学」

香川雄一(滋賀県立大):「健康・環境地理と都市社会地理学」

埴淵知哉(中京大):「近隣—健康研究の課題と地理学諸分野との融合について」

米島万有子(立命館大):「蚊媒介性感染症の流行リスクの把握—滋賀県琵琶湖東沿岸地域を事例に—」

永田彰平(立命館大・院)・中谷友樹(立命館大):「新型インフルエンザ流行の空間的伝播モデリング—茨城県における公立小中学校の閉鎖措置実施データを用いて—」

[ウェブサイト]

ウェブサイト上で、研究集会の予定を告知した。(https://www.facebook.com/healthgeo)

[メーリングリスト]

メーリングリスト上で、メンバーの研究成果の紹介、健康地理関連のイベントの紹介、また、研究集会に関する意見交換と報告者の募集などを行った。

(29)「新しい公共」の地理学研究グループ

代表者 佐藤 正志

2015年度は下記の通り活動を行った。

[第1回研究集会] 2015年3月29日(日)、於 日本大学文理学部、参加者 17名。少子高齢化と地域問題研究グループと共同開催。

①報告

畠山輝雄（鳴門教育大）：「廃校跡地を利用したデイサービスによる過疎集落維持の取り組み—徳島県三好市三野地区大刀野山地域を事例に—」

②ビジネスミーティング

今年度のグループ活動の方針について及びグループの研究成果公表について

[第2回研究集会] 2015年8月22日（土）、於 東京大学駒場キャンパス、参加者7名。

①報告

前田洋介（新潟大）：「日本におけるコミュニティへの権限委譲の動向と背景—自治体へのアンケート調査結果をもとに—」

②ビジネスミーティング

今後の研究グループの活動予定及びグループの研究成果公表のスケジュールについて、審議した。

[第3回研究集会] 2016年1月23日（土）、於 静岡大学静岡キャンパス、参加者9名。

①ビジネスミーティング

グループの研究成果公表について、参加者の研究進捗の確認および討論と今後の日程について確認した。

2016年度以降の研究グループ活動継続について、審議し決定した。

(30)都市の社会・文化地理学研究グループ

代表者 大城 直樹

本年度より大衆文化の地理学研究グループと都市社会地理学研究グループは合併し、名称を標記のように変更した。2015年度の活動記録は以下の通りである。春・秋2回の学術大会時に研究集会（先達と若手の文化研究）を行い、8月と10月には現状を認識し過去の記憶を辿るべく（居酒屋ブーム、オリンピック）巡検を行った。また7月と2月には時宜に応じたトピック（東京のアート・シーン、オリンピック）を扱うミニ研究集会をもった。詳細は下記の通りである。なお、当研究グループでは、メーリングリストを活用し案内を行い、情報を交換・共有し、webページ上に活動記録の詳細を掲載している [http://www.kisc.meiji.ac.jp/~oshiro/pub_cul.html]。

[第10回研究集会] 2015年3月29日（日）15時～17時、於 日本大学文理学部。

山田晴通（東京経済大）：「ポピュラー音楽研究から「大衆文化の地理学」の射程を考える」

[第11回研究集会（巡検）] 2015年4月3日（金）17時～21時、参加者8名。

杉山和明（流通経済大）〔案内者〕：「野毛町境界の現在を見て歩く」

[第12回研究集会（巡検）] 2015年7月12日（日）14時～18時、参加者9名。

荒又美陽（恵泉女学園大）：「東京オリンピック開催予定地（湾岸部）を歩く」

[第13回研究集会] 2015年9月9日（水）14時～16時、於 明治大学研究棟、参加者7名。

クリスティアン・モーガー（日本学術振興会外国人特別研究員）：「Tokyo's Art Scene in a Global Age」

[第14回研究集会] 2015年9月19日（土）15時～17時、於 愛媛大学城北キャンパス、参加者8名。

半澤誠司（明治学院大）：「文化（創造）産業研究のこれまでとこれから」

[第15回研究集会] 2016年2月11日（木）15時～20時、於 目白大学、参加者5名。

荒又美陽（恵泉女学園大）：「レニー・リーフェンシュタール『オリンピア』（民族の祭典・美の祭典）を見る」

9. 他学会との交流等

- (1) 第3回中部ライフガードTEC2015——防災・減災・危機管理展（後援）
2015年5月21日（木）～5月22日（金）にポートメッセなごや2号館において開催された。
- (2) 2015年日本地球惑星科学連合大会
2015年5月24日（日）～28日（木）に幕張メッセにおいて開催された。
緊急セッション「2015年4月25日ネパール地震M7.8」（共催）
セッション「津波堆積物」（共催）
セッション「人間環境と災害リスク」（共催）
セッション「ジオパーク」（共催）
- (3) 第23回地図地理検定（後援）
2015年6月21日（日）に開催された。
- (4) 富士学会2015年春季学術大会（後援）
2015年6月27日（土）～28日（日）に千葉県立中央博物館において開催された。
- (5) 第2回「震災対策技術展」大阪（後援）
2015年6月4日（木）～5日（金）にコングレコンベンションセンターにおいて開催された。
- (6) 日本シミュレーション&ゲーミング学会主催国際会議「46th ISAGA conference / Japan Association of Simulation & Gaming」（後援）
2015年7月17日（金）～21日（火）に立命館大学朱雀キャンパスにおいて開催された。
- (7) 国際第四紀学連合第19回大会（共催）
2015年7月26日（日）～8月2日（日）に名古屋国際会議場において開催された。
- (8) 日本学術会議公開シンポジウム「人口減少下における地方の創生策はいかにあるべきか——東京一極集中是正の可能性」（後援）
2015年8月30日（日）に日本学術会議講堂において開催された。
- (9) 全国中学校地理教育研究会第56回全国研究大会（後援）
2015年8月1日（土）～2日（日）に日本地図センターにおいて開催された。
- (10) 第54回地図ならびに地理作品展（後援）
2015年9月5日（土）～19日（土）に広島市こども文化科学館において開催された。
- (11) 第10回中日韓地理学会議（共催）
2015年10月9日（金）～12日（月）に中国・上海において開催された。
- (12) 第4回アジア太平洋ジオパークネットワーク山陰海岸シンポジウム（後援）
2015年9月15日（火）～20日（日）に京都府京丹後市・兵庫県豊岡市・香美町・新温泉町、鳥取県鳥取市・岩美町において開催された。
- (13) 2015年度「初等中等教育におけるGISを活用した授業に係る優良事例表彰」（後援）
2015年10月10日（土）～11日（日）に慶應大学三田キャンパスにおいて初等中等教育現場において、GISを実践的に活用した授業に取り組んでいる教員に対し、表彰が行われた。
- (14) GIS day in 東京2015（後援）
2015年10月18日（土）に首都大学東京・南大沢キャンパスにおいて開催された。
- (15) 鳥取県「第17回児童生徒地域地図発表作品展」（後援）
2015年10月21日（水）～12月19日（土）に倉吉未来中心、鳥取市歴史博物館（やまびこ館）、とりぎん文化会館において巡回展示が開催された。
- (16) 地図展2015 首都東京1945（後援）
2015年10月23日（金）～11月30日（月）に地下鉄半蔵門線口コンコース三越駅付近通路において開催された。
- (17) 旭川市「第25回私たちの身のまわりの環境地図作品展」（後援）
2015年10月24日（土）・25日（日）に旭川市科学館において開催された。
- (18) 岐阜県「第21回児童生徒地図作品展」（後援）
2015年10月31日（土）～11月26日（木）に岐阜県図書館において開催された。
- (19) 第24回地図地理検定（後援）
2015年11月15日（日）に開催された。
- (20) GIS day in 中国2015（後援）
2015年12月3日（木）に広島大学において開催された。
- (21) 多摩市「第19回身のまわりの環境地図作品展」（後援）
2015年12月11日（金）～12月13日（日）にパルテノン多摩において開催された。
- (22) 第19回全国児童生徒地図優秀作品展（後援）

2016年1月7日（木）～2月21日（日）に地図と測量の科学館、国土交通省1階展示コーナー、NHKふれあいホールギャラリーにおいて開催された。

(23) 第19回「震災対策技術展」横浜（後援）

2016年2月4日（木）～5日（金）に横浜国際平和会議場において開催された。

2016年度研究グループ一覧

2016.2.20 常任理事会承認

	グループ名	代表者
継 続	<ul style="list-style-type: none"> ・近代日本の地域形成研究グループ ・乾燥・半乾燥地域研究グループ ・都市気候環境研究グループ ・土地利用・陸域変化研究グループ ・離島地域研究グループ ・環境地理教育研究グループ ・流通・消費の地理学研究グループ ・中国地理研究グループ ・産業経済の地理学研究グループ ・ネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループ ・国際経済・経営地理学研究グループ ・エスニック地理学研究グループ ・地図・絵図資料の歴史GIS研究グループ ・観光地域研究グループ ・農業・農村の地理学研究グループ ・都市地理学研究グループ ・日本における亜高山・高山域の植生・環境変遷史研究グループ ・持続可能な交通システム研究グループ ・自然保護問題研究グループ ・少子高齢化と地域問題研究グループ ・ジェンダーと空間/場所研究グループ ・GISと社会研究グループ ・東日本大震災による被災地の再建にかかわる研究グループ ・日本アルプスの大規模地すべり研究グループ ・水と人の地誌研究グループ ・気候と災害の歴史研究グループ ・健康地理研究グループ ・「新しい公共」の地理学研究グループ ・都市の社会・文化地理学研究グループ 	天野 宏司 鹿島 薫 榊原 保志 木本 浩一 須山 聡 朴 恵淑 土屋 純 小野寺 淳 末吉 健治 渡辺 和之 シュルンツェ・ロルフ 平 篤志 大石 太郎 藤田 裕嗣 カロリン・フンク 森本 健弘 阿部 和俊 沖津 進 土谷 敏治 青木 賢人 宮澤 仁 影山 穂波 若林 芳樹 豊島 正幸 荻谷 愛彦 宮岡 邦任 三上 岳彦 埴淵 知哉 佐藤 正志 大城 直樹
新 設	<ul style="list-style-type: none"> ・地理学のアウトリーチ研究グループ ・地域連携活動研究グループ 	長谷川 直子 山田 浩久